
祭りの後に

零月 華夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祭りの後に

【Nコード】

N0753X

【作者名】

零月 華夜

【あらすじ】

とある吸血鬼と少女……の話。

明日は国を挙げての祭典がある。

皆がお祭り騒ぎになる中、出会ってしまった二人による3日間という短いお話。

(多分)

元々短編にするつもりが、思ったより長くなりそうなので連載に……
な、なぜ!?
ヒロインちゃんが私の手に負えません!!

更新は遅めです。

夜道を歩けば…

「……っは、はあ、はあ」

暗い裏路地にそれはいた。

ここはアテミスという名の小国の城下町である。

しかし、2、3年ほど前まで約60年ほど続いた戦争をしていた。たくさん犠牲を出した無益な戦争。

その名残で、城への大通り以外の街の道は要塞の様に複雑に絡み合っている、長年住んでいても迷うほど入り組んでいる。

特にこの地域は戦の爪痕がひどく、人もほとんど住んでいない。

こういう場所にはあまり表で出来ないようなことをしたり、目を浴びれないものが集まることが多い。

「ぐっ……」

そこには、怪我をしている様子の人が……いや、吸血鬼がいた。

年は20代前半くらい青年。長袖、長ズボンの黒ずくめで、おまけに髪まで黒いので、昼はともかく夜は闇にまぎれてしまっている。目は鋭く、血を吸うという属性を現しているかのように深い深紅。

深紅の目には、深い闇と焦りが浮かんでいる。

その腕と脇腹に深い怪我をしているようだ。

そして、時折聞こえる喧騒から逃げるように複雑な道を当ても無く走り抜ける。

「つつ……げほ……げほ……」

血を吐きながら逃げる。おそらく、もうそう長くは走れないだろう。そして、意識が朦朧として、気を失いかけたころだった。

地面に倒れたときに、小さい人影を見た気がした。

.....

「ミネ、もう上がっていいわよ。」

恰幅のいいおかみさんがパンを持ってこちらに来た。

「はい。.....これは？」

ここは城下町の大通りにあるパン屋である。

私と、おかみさんだけで経営しているパン屋で、小さいパン屋だが割と人気があり、毎日忙しいが充実した日を送っている。

特に明日は国を挙げての式典があるので、その準備でいつも以上に忙しかった。

やっと終わるころには、外はもう真っ暗で。

きつと皆、明日に向けて家でそれぞれの時間を過ごしているのだろ
う。

明日、ここがお祭り騒ぎになるとは想像もつかない静けさだ。

「ふう。」

さつき出てくるとき、パン屋のおかみさんがパンを持たせてくれた。
どうやら私の妹が祭りにいけないということで、少しでも祭りを味
あわせてあげたいと言ってくれた。
おかみさんの温もりを感じて心が温かくなる。

「……暗い。早く帰らないと。」

でも私が今歩いている道は冷たくて。

もともと大通り以外は治安は悪いのだ。夜に歩くななんてかどわか
して下さいと言っている様なもの。

特に女、子供は標的になりやすいので早く帰りたい。妹もきつと心
配している。

仕方ないので、普段使うことのない近道を使う。

そして、それはもうすぐ家が見えるというところだった。

夜道を歩けば…（後書き）

前回とかなり変わってます。

コメントなど、ぜひよろしくお願いします。

出会い………？（前書き）

血が苦手な方ご注意ください。

近くで複数の足音がする。それに混じって物騒な叫び声も。

「つつ、こんなときに！」

こんな所に倒れていては、格好の餌食だろう。
早く移動しなければ、最悪殺される。

「~~~~重っ!!」

さすがに男性を軽々担ぐことは出来ない。

しかたなく、引きずって物陰に移動させる。これでとりあえずは隠れるだろう。

そして、私は五感を総動員させて人のいる方へと行く。

どうやら、廃屋の中にいるようだった。

どこかの金持ちの家だったのか、無駄に広くて隠れる場所がないので、会話が聞こえる距離まで近づくことが出来ない。

とりあえず出来るだけ近い物陰に隠れて、様子を窺う。

「……………いたか？」

「いや、こつち…ない。そ……………」

「……………どい……………さがし……………」

距離があるせいでうまく聞き取れない。

「はや……………ないと。吸血鬼が……………」

そこまで聞いて、意識が思考へと向く。

「吸血…鬼？」

何故あんな三流以下のような者が吸血鬼を探しているのだろう。あれは確か国で一級の手配を受けていたはずだ。国有数の能力の持ち主も手を焼いているというのに。

「ドルジナス卿……闇社会……」

「……なるほどね。こいつら、貴族の飼い犬が。」

おそらく金持ちの誰かに依頼でもされたのだろう。そこまで考えたところで、私は姿を表す。

「だ、だれだ！　！？ぐあっ」

最初に気づいたひよる長い男の首を折る。

「さあ、いったい誰だろうね？」

私は小首をかしげ……
血の噴水を後にした。

目覚めたそこは…… (上)

「っー!!」

俺が目を覚ますと、眩しい日の光が目には焼くついた。

目の上に手をあてがい、じっとまぶたの裏の痛みをやり過ごす。

ようやく日の光に目が慣れて、見渡したそこは、どこかの小部屋のようだった。

長く使われていないのか、どこか誇りっぽいにおいがする。それに、さびしく感じるほど簡素な部屋だった。

部屋にはベットにソファ、机とカーペットぐらいしかない。

そして、驚くことに俺の体は傷の手当てがしてあった。

「……………」

傷の手当てがしてある。

傷の……(ry

これには、驚いた。何故傷の手当てがしてあるのかとか、誰がしたとか浮かんでこないほど驚いた。

だって俺は夜の道を走って逃げていた。5人組の男に殺されそうになり、あんな半端な男どもに殺されてたまるかと、必死で逃げたはずだ。

しかし、途中で不覚にも六人目に気づかず、傷を負った。それでも、あんな野郎に殺されたくなくて、無我夢中で路地を歩いて……………

「あれは……」

そういえば、力尽きて倒れてしまったとき。確かに小柄な女を見た気がした。

不思議と安心感があつて、敵意がまったく感じられなかった。だからこそ、あつさり気絶してしまったわけだが……。あれは……。そう、あれはとても綺麗な金髪だった。一瞬だったが、月の光に輝いていた金髪を確かに見たような。

「失礼します。」

「!?!」

ノックの後に入ってきたのは、年齢10と幾らの少女だった。だがその少女、輝く金髪に金色の瞳。そしてあどけない顔はとても整っていた。

「どう？怪我は大丈夫？」

そういつて無邪気に俺の顔を覗き込む。

「王……族……？」

「え？なーにお兄ちゃん？」

少女はわけがわからないという風に首をかしげている。だが、確かに金髪金目。王族の血縁者の証だ。

「お前……」

ばんっ

「何してんのメデイー！」

俺が話し声を遮るかのように、この部屋の扉が開いたかと思うと、女が急に飛び込んできた。

そう、女。

なぜか、この人が昨日会った人なんだ。という確信が俺の中にできた。言葉には出来ないが、こう「ちよつとあなた！」

「メデイに変なことしてないでしょうね!？」

「……………は？」

まさか話しかけられると思わなかったので、突然のことにびっくりして思考が追いつかない。

「なによその呆けた顔は！バカにしてんの？張っ倒していいの？」

「だ、ダメだよおねえちゃん！？病人をなくっちゃだめえ（慌）」

今にも殴りかかってきそうな女とそれを必死で止めるメデイとか言う少女。

思考が固まっている横で、やけに冷静に見ている俺がいた。

「とめないでよ！メデイ。この男むかつく！！きつと殴ったら目が覚めるわよ。起こしてあげましょうー！」

「殴っちゃダメ〜（汗）」

わいわい

きゃぴきゃぴ

「あ、頭に響く……」

そして俺の頭はがんがんしてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753x/>

祭りの後に

2011年12月31日00時52分発行